

UK-Japan Genome Stability Meeting への参加、

および Crick Institute, Cambridge University への訪問報告

国立遺伝学研究所 ゲノムダイナミクス研究室

総合研究大学院大学五年一貫博士課程 3 年

飯田史織

海外出張期間：2023 年 1 月 15 日～1 月 25 日

学会開催場所：University of Sussex, Brighton, UK

今回の海外出張では、イギリス・Brighton にある University of Sussex にて開催された UK-Japan Genome Stability Meeting に参加し、発表した。この学会は、University of Sussex の Genome Damage and Stability Centre と遺伝研の Joint meeting であり、日本学術振興会の支援の下、2 日間開催された。また、学会参加の前後で London にある Crick Institute の Frank Uhlmann 博士、Cambridge University の Rosana Colleparado-Guevara 教授を訪問した。

今回の目的は、UK-Japan Genome Stability Meeting において昨年発表した論文 (Iida et al., *Sci Adv*, 2022) についての Short talk, Poster presentation をおこない、論文の内容を宣伝すること、参加者の方々と意見交換をすることであった。また、学位取得後のポスドク先候補として、Crick Institute や Cambridge University のいくつかの生命科学のラボを訪問した。

まず、学会の様子から紹介したい (図 1)。学会は比較的小規模であり、日本からは遺伝研、京都大、がん研、東京薬科大から 11 人が参加した。イギリス国内からは、University of Sussex, University of Manchester, University of Dundee, および University of Aberdeen から 18 人が参加した。そのほかに、主に University of Dundee の大学院生によるポスターセッションがあり、朝から晩まで激論が続いた。Genome Damage and Stability Centre は主に DNA repair を専門としている研究者で構成されており、Talk の内容も DNA damage や repair, recombination に関連するものが多かった。特定の分野の研究者をまとめて雇用するのは、日本とは大きく異なるシステムだと感じた。私は Short talk と Poster presentation を両方おこなったため、多くの人と意見を交わすことができた。特に、私が示した、DNA damage に



図 1: (左上) 学会が行われた会場。
(右下) University of Sussex の看板。



図 2: Crick Institute の前で。左は筆者、右は指導教員の前島教授。

よるクロマチンの動きの上昇について、どのようなメカニズムによって上昇が起きると考えられるか、専門家の視点からのアドバイスを多く得ることができた。

次に、学会開催前に訪問した、Crick Institute (図2) について紹介する。Crick Institute は London の中心の駅 St. Pancras International の目前に位置し、2016 年に建てられた新しい建物である。中は巨大なショッピングモールのように、中央に吹き抜けが二つあった (図3)。ラボ同士の交流がしやすいよう、ラボ間には垣根がなく、PI の部屋もすべてガラス張りで丸見えである。そこかしこに Discussion 用のソファや椅子が並んでいて、とてもオープンな雰囲気を感じた。

最後に、Cambridge University について紹介する。Cambridge University では、学生も教員も Department (日本で言う学部学科) のほかに、College に所属を持つ。今回、R. Collepardo 教授に Trinity College での宿泊を手配してもらった。Trinity College は、かのアイザック・ニュートンがかつて在籍したという、歴史ある College である。建物は煉瓦造りで古めかしく、18 世紀の人間がいまにも飛び出してくさうである (図4 上)。映画ハリーポッターで出てきそうな長机の食堂で朝食を食べた (図4 下)。

Crick Institute においても、Cambridge University においても、いくつかの生命科学のラボを訪問し、最先端の研究の話を伺うことができ、学位取得後の進路を検討する上で有用な情報を得ることができた。また、自らの研究テーマについても、さまざまな人と議論を交わすことができた。直接ラボを見学し、PI やラボメンバーと直接話すことで、ラボの雰囲気や実験設備などを知る機会となった。Crick Institute、Cambridge University の大学院生たちはとても優秀で積極性が高く、わたしも研鑽を積む必要があると感じた。このような機会を与えてくださった遺伝学専攻の旅費支援制度、遺伝学普及会の海外渡航費助成制度に感謝申し上げる。

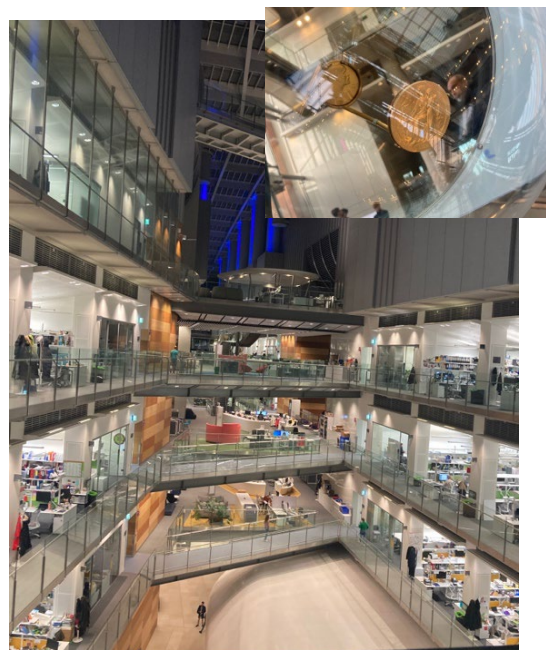


図3: (右上) Francis Crick が受賞したノーベル賞のメダルが入口に飾ってあった。
(下) Crick Institute 内部の写真。左右にそれぞれのラボのデスクが見える。

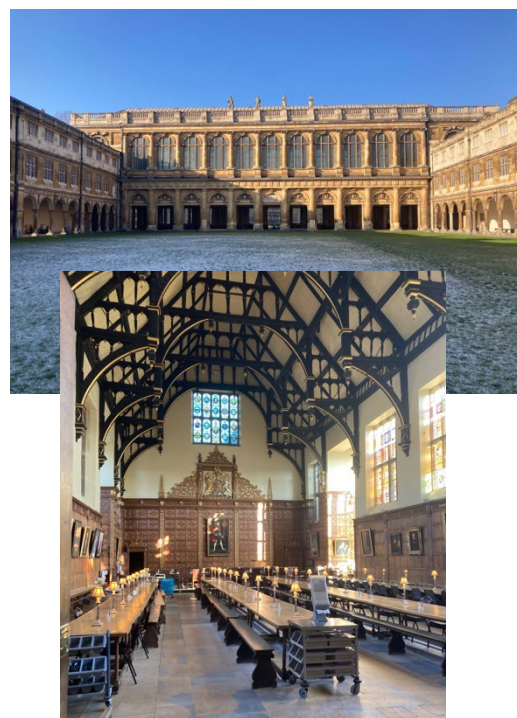


図4: (上) Trinity College の中庭。広すぎて入り口を見つけるのに苦労した。 遺伝研の倍近い広さらしい。
(下) Trinity College の朝食会場。